2019 年度イラク・小児がん支援事業支援報告

■実施地域：イラク共和国クルド自治区
■支援対象者：小児がん患者、患者家族、貧困患者家族

【背景】

2018 年以降、徐々にクルド自治区の経済の回復は見られているが、劣悪な保健インフラに加えて国立病院への医薬品の供給は現在も十分に行き届いてはいない。加えて中央政府地域における政治不安や 2014 年以降の過激派組織 IS（イスラム国）の台頭と掃討作戦によるインフラの破壊の影響を受け、比較的治安の安定しているアルビル県の医療機関にも患者が増加し、受け入れ可能人数を超える状況に陥っている。

また、がん専門病院においてはイラクの特性上、男性家族が病室に宿泊することができず、宿泊場所を求める患者家族が後を絶たない。患者や患者家族に対する心理社会的な支援も十分に行われず、また、がんに対する誤った知識を持つ人も多く、それによって苦しむ患者や患者家族も多い。JIM-NET では一貫して小児がんの子どもたちへの医薬品支援や医療支援を行なってきたが、がんの子どもを常に支える患者家族の心のケアや地域住民や学生に対するがんの啓発活動も同等に重要だと考え、イラクでは初となる心理社会的な支援を行なう小児がん総合支援施設「JIM-NET ハウス」を建設、また地域の学校におけるがんの啓発活動を実施している。

子どもたちが学べる部屋や創作できる部屋を完備し、3F は宿泊階となっており最大 20 名ほど迄宿泊が可能

【小児がんの支援状況】

2019 年度も例年通りの抗がん剤を中心とした医薬品をがん専門病院に届け、子どもたちの治療に用いられました。小児がんの治療に使われる抗がん剤は一般的な抗がん剤とは異なり、中央政府から配分される医薬品からは漏れることや数が十分でないケースも少なくありません。その分を JIM-NET が病院薬剤部及び医師と相談の上、3 か月一度のペースで医薬品を補てんする形で支援しています。

イラクにおける小児がんの中で圧倒的に多いのが、ALL（急性リンパ性白血病）やリンパ腫といった血液のがんです。日本や欧米では約 80-90%以上の確率で完治可能な病気とされていますが、イラクの場合は治療放棄や治療開始の遅れ、感染症などにより 30%前後の子どもたちは命を落としており、JIM-NET が支援している子どもたちが亡くなることも少なくなりません。

また、過激派組織 IS(イスラム国)による影響は未だ残っており、国境付近では安心して治療を受けることができず、クルド自治区の病院まで治療に訪れる患者や紛争が続くシリアからも治療のために国を越えて治療に訪れている患者もいます。貧困患者支援ではこうした患者への医薬品購入支援（※病院で手に入らない薬については薬局で購入の必要がある）や病院までの交通費支援を行なっているが、支援を必要とする患者が多く、支援は追いついていません。クルド自治区の子どものみならず、国内外の避難民のがんの子どもたちの命を守るためには病院への支援と貧困患者支援を続けていく必要があります。

医薬品や医療品支援は医師と薬剤部と話し合って決められる

苦痛な治療を受けながらも、快方に向かう子どもたちもいる

JIM-NET ハウスではボランティアの先生が治療中の子どもたちへの学習支援やアートによる心のケアも行なっています。また、バンドによる音楽ライブや映画上映会、地元の大学生によるパーティなど様々なアクティビティを通して子どもたちを支える活動が行われています。

病院の庭のバラを使ったブーケ作りのワークショップか開催

バイオリニストの SHOGO さんによる音楽ライブ

JIM-NET ハウスでは患者家族からの悩み相談も随時受けており、治療への不安だけでなくそれに係る生活の不安、孤独を口に空く患者家族も多く、スタッフが個別に対応しています。また、それぞれの家族には感染症対策の冊子を配り、家族が気を付けるべきことを丁寧に説明しています。

患者とその家族にスタッフが感染症への対策を説明

遠方から来た患者とその家族、「不安でいっぱいだ」と口にする

また患者家族にとって、子どもが治療中に宿泊する場所がない問題が肉体的にも経済的にも大きなダメージとなっており、JIM-NET ハウスは患者家族への負担を軽減させています。利用者の多くは「ここがなければ外で寝るか、お金を払ってどこかへ泊まらなくてはいけないところだった。本当に助かった。」と口をそろえます。

ファミリー用の部屋もあり室内にトイレ・シャワーが完備されている

イラクにおける「がん」に対する認識は日本とは異なる部分があり、感染すると考える人も少くありません。実際に親戚から縁を切られたという人たちもいました。「がん」に対する知識不足や誤解は、がんの子どもたちを傷つけることもあります。実際に、治療中の子どもの復学に教育者が反対したり、同級生が心ない言葉を浴びせる

という現状があります。そこで JIM-NET では 2017 年度より学校における啓発活動をアルビル保健局の協力のもと実施しています。
「がんの同級生がいたらどう接したらよいか」「がんとはどういう病気か」など具体的な事例を用いて生徒たちに伝えています。

「がんは移ると思ってました」と話す生徒も少なくなりません

【成果と実績】

1- アルビル市内のがん専門病院ナナカリ病院への医薬品及び医療品支援
45,283,000 円の医薬品支援を実施。ナナカリ病院で治療を受ける 200 人を超える子どもたちに医薬品が渡っています。またフロサイトメトリー（細胞の解析を行ない治療に役立てる検査手法で、急性白血病、多発性骨髄腫、悪性リンパ腫の診断に必要な血球細胞の表面マーカーの解析を行なう）のキットを支援。

2- 貧困患者支援
2,320,950 円の医薬品購入代や通院のための交通費、状況に応じて生活に必要な資金を支援。
1 人あたり月 50-100 米ドル、地元の患者 57 名、国内避難民及びシリア難民の患者 47 名を支援。
特に国内避難民やシリア難民は貧困率が高く、病院に来るまでの交通費さえ捻出できないという相談が後を絶ちません。
2017 年より支援をしていたアンマール君（享年 11 歳）は国内避難民としてモスルに住んでいましたが、2014 年に ALL（急性リンパ性白血病）を発症、モスルで治療を受けていましたが、過激派組織 IS「イスラム国」の影響で十分に治療を受けることができなくなりナナカリ病院へと転院してきました。アンマール君の父も仕事を失い、病院までの交通費や携帯電話のチャージ代なども支援していました。容体が悪化し、2019 年 9 月にアンマール君はこの世を去りました。悲しみの中にいた父は、JIM-NET に感謝を伝えてくれましたが、「何もかも失った上に子どもまで失った悲しみに寄り添ってくれて、どうもありがとう」と JIM-NET ハウスに挨拶にきてくれました。
「貧困患者支援」は経済的な支援と同時に心理社会的な支援を行なっていかなければなりません。

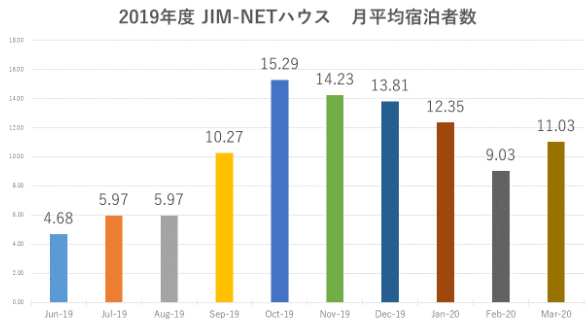
アンマール君と父が最後に訪れた JIM-NET ハウスにて

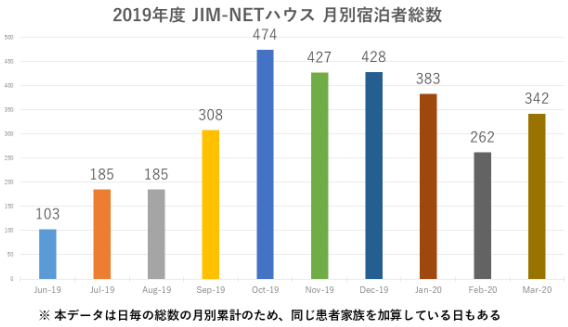
3- JIM-NET ハウス運営

5 月 16 日に開所式が行われ、6 月から本格的な運営が始まりました。

6 月からは夏休みが始まり、JIM-NET ハウスには多くの患者やその兄弟が訪れ、アルビル教育局の協力のもと、算数や国語、英語、クルド語、理科などの補習が行われました。治療中の子どもたち同士が今まで一緒に学んだり、遊ぶことがなかったこともあり、病院にいる時とは違った表情で JIM-NET ハウスに来る子どもたちが沢山いました。夏休みの期間中は一日 20-30 名ほど、夏休み終了後は一日 3-8 名ほどの子どもたちが JIM-NET ハウスを利用しています。学校に戻りたいと希望する子どもたちが円滑に戻れることを目指し、今後も教育局と連携していく予定です。

宿泊施設の利用者は時期によって利用人数が大きく異なりますが、病院側との連携で必要な家族にサービスが行き届いています。





【補足】

現在、COVID-19 の影響でイラクも都市封鎖が続いており、解除と封鎖が繰り返されています。

JIM-NET スタッフや支援している患者が感染したという知らせは受けていませんが、抵抗力が落ちている子どもたちは特に気を付ける必要があり、感染症対策を徹底して支援活動を継続しています。

今年度の支援事業も従来通り実施していますが、駐在員は未だイラクに戻れておりません。イラク側の空港が開けばすぐにでも渡航を予定しております。ぎりぎりの状態での支援活動ではありますが、支援を止めることなく実施して参ります。

今年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。